



大学図書館問題研究会京都支部 Webサイトをリニューアルしました

大図研京都支部は、2015年11月からwebサイトをリニューアルいたしました。

URLの変更はありません。

<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

今後もこのサイトから積極的な情報発信に努めてまいりますので、引き続きどうぞ
よろしくお願ひ申し上げます。

[目次]

大学図書館問題研究会京都支部 Webサイトをリニューアルしました	…	1
小特集：大図研京都ワンディセミナー「電子ジャーナルはこれからどこへ向かうのか？ ～深田氏・林氏による学術情報動向に関する講演会～」参加報告		
学術情報流通のこれまで・いま・これから	藤江 雄太郎	… 2
歴史は戻せない—深田氏の言葉の重み	中村 健	… 3
学術情報流通の未来について考える一日	塩野 真弓	… 5
小特集：大図研京都ワンディセミナー「学びの空間 「キャンパス全体がラーニング・プレイス (Commons)」の実践」参加報告		
ラーニング・プレイスと「ありえないはありえない」の射程	齊藤 涼	… 7
進化し多様化するキャンパス	加川 みどり	… 8

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com (大学図書館問題研究会京都支部)

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

小特集:大図研京都ワンディセミナー**「電子ジャーナルはこれからどこへ向かうのか？」****～深田氏・林氏による学術情報動向に関する講演会～」参加報告****学術情報流通のこれまで・いま・これから****藤江 雄太郎**

2015年7月18日、キャンパスプラザ京都にて開催の大図研京都ワンディセミナー「電子ジャーナルはこれからどこへ向かうのか？ ～深田氏・林氏による学術情報動向に関する講演会～」に参加させていただきました。

本稿では、お二人の講演の内容をご紹介します。なお、お二人とも講演内容は所属機関を代表するものではなく、あくまで個人的見解ということでしたのでご注意ください。

(1) 深田良治氏（ケンブリッジ大学出版局）のご講演

深田氏は、Elsevier のオランダ本社勤務を皮切りに、エルゼビア・ジャパン、シュプリンガー・ジャパン等、海外の学術出版社・ベンダーの日本法人で長年勤務して来られました。そこから得た豊富な経験と知識をもとに、学術出版の歴史と現状そして今後の展望についてお話をしてくださいました。

まず、STM (Science, Technology, Medicine) 学術出版の歴史について、手紙→本 (モノグラフ) →ジャーナル→電子化という流れとその変化の要因が解説されました。STM 分野でもほんの 40 年程度前まではまだモノグラフが主流であり、ジャーナルはメインの学術出版でなかったというのが深田氏の印象ということで、改めて学術出版の変化の激しさを感じました。また、Elsevier が今日のように世界的な学術出版社になったのは、オランダ国内に大学数が少なくマーケットが小さかったため、海外に活路を見出すしかないという環境があった、というのは興味深いお話でした。

今後の課題については、日本の研究者・学生がより電子コンテンツを利用しやすいように、検索・利用・投稿など出版のさまざまな段階での言語横断プラットフォームの実現を挙げられました。また、各機関の経営者層への電子ジャーナルの費用対効果についての説明の必要性が近年一層高まっているため、より使いやすい利用統計レポートの提供も検討していく必要があるだろうと述べられました。

(2) 林和弘氏（文部科学省 科学技術・学術政策研究所 科学技術動向研究センター）のご講演

林氏は日本化学会での勤務を経た後、現在 NISTEP (文部科学省 科学技術・学術政策研究所) で学術情報流通について調査活動を行い、政策提言等をなさっています。豊富な知識や経験をもとに、現在そして将来の学術情報流通、とくにオープンサイエンスについて俯瞰的に分かりやすくお話してくださいました。多岐にわたるお話で全てを紹介できませんので、個人的に興味深かった、オープンデータを通じてのオープンサイエンスについてのお話の部分を紹介させていただきます。

日本において、論文のオープンアクセスについてはさまざまな実践が行われているが研究データのオープン化についても議論・実践をしていく必要がある、とのご指摘がありました。また、論文のオープンアクセスも含めて、単に公開するだけでなく、クリエ

イティブ・コモンズ・ライセンス等で利用条件を明示することで論文・データの利活用を促進することにより、これまでのいわゆる学術情報のコミュニティ（研究者—出版社—図書館）を越えて、広く研究活動の促進につながるだろうというお話もありました。一方で、研究データをオープン化することで最終的な研究成果を他の研究者に奪われてしまう危険性もあります。この点に関して、EUの研究成果利活用ガイドラインにおける、研究データを網羅的に収集・保存して原則公開としつつも、公開することによって不利益が生じる場合は embargo 付きでの非公開を認めるという形を紹介されていました。また、研究データ自体が1つの成果となるデータジャーナルの登場についてのご紹介もありました。データジャーナルの普及や、リポジトリ等での識別子を付与した研究データの公開により、研究データ自体が1つの研究成果として評価されるようになれば、研究データのオープン化の大きなインセンティブになるであろうという見通しも示されました。

最後に、これまで機関リポジトリの運営を通じて論文のオープンアクセスを進めてきた図書館職員が、研究データの公開についてもふさわしいポジションではないかという指摘がありました。研究データにメタデータを付与して適切な形式で公開するという curator の役割も含めて、「研究者のパートナー」としての新しい図書館職員像を示唆されて講演を終えられました。

前日からの台風の影響で、公共交通機関のダイヤが乱れていたにもかかわらず、大勢の方が参加なさっていて、電子ジャーナルをはじめとする学術情報流通への大学図書館員の皆さんの関心の高さを改めて感じました。

個人的にも学術情報流通の世界が本当に刻一刻と変化して行っていることを実感したセミナーでした。各大学図書館が人員や予算の削減で運営が厳しくなる一方で、こういった状況の変化にも対応していく必要があり、必然的に業務の取捨選択や変革が求められていきます。つつい普段の業務に追われて近視眼的になってしまう私ですが、所属する大学がどのようなことを目指しているのかを知り、それに応じて自らの所属する大学図書館では何を重視してサービスを行っていくべきなのかを考え続けることの必要性を改めて感じました。

講師のお二方と、このような有意義なセミナーを開催して下さった大図研京都支部の皆様改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

ふじえ ゆうたろう（大阪大学附属図書館）

小特集:大図研京都ワンディセミナー

「電子ジャーナルはこれからどこへ向かうのか？」

～深田氏・林氏による学術情報動向に関する講演会～参加報告

歴史は戻せない—深田氏の言葉の重み

中村 健

ワンディセミナーで深田良治氏が日本における電子ジャーナルの歴史について語られるというのを知り、慌てて申し込んだ。

深田氏はチラシの案内にもあったとおり、エルゼビア、シュプリングーなどの海外学

術出版社の日本法人のトップを歴任され「日本の電子ジャーナルの父」というべき存在だ（現在はケンブリッジ大学出版局）。

ご存知のとおり、大学の予算減と価格上昇により、電子ジャーナルのビッグディール・モデル（包括的なアクセス契約）は曲がり角を迎えている。大量の雑誌を自由に購読できる環境から読みたい論文だけを入手する環境へと電子ジャーナルの受容環境が変化を迎えている今、深田氏が語る言葉は、歴史的な重みをもつ。その意味を噛みしめたかった。

本論に入る前に、思い出話を一。

私自身が大学図書館に入り雑誌管理業務に携わったのが確か2000年を少し過ぎた頃。SD-21の無料期間が終了して、大学としてどのように予算を集約し契約をしていくため、購読規模維持をベースとした価格体系に戸惑いを覚えながらも上司と一緒に全学の説得をしてまわった記憶がある。とにかく電子ジャーナルの存在が、よく理解できなかった。

そういうもどかしさを胸に残したままのある日、深田氏が書かれた「国際的 STM 出版社で働く人のお勧めの本 3 冊」（『情報管理』50（7）、2007.10）に紹介された文献を読み、霽がすこし晴れた。電子ジャーナルがビジネスであり、その形が何となく理解できた。

（われわれ 40 代前後の図書館員は、紙から電子への移行を「同時代体験」として持っている世代であり、そのハイブリットな体験が強みとなっていないだろうか）

また、あるとき、NII（国立情報学研究所）1Fのロビーを深田氏が数名の社員と一緒に歩まれる姿をお見かけしたことがある。ゆっくりとした足取りで入口へと進まれるたびに、ロビーが「ただ事ではない」空気が変わっていった。

私は思わず畏れを覚え、「雲の上の存在」という言葉を意識した。

深田氏がこれまでの歩みをどのように振り返られ、未来を見据えているのか？ 一筋の光明を求める気持ちが、私も含めてフロアの関心を大きく占めていたと思う。

私自身の不勉強な点が多々あったせいか、今回のお話は意外な部分が多かった。

まず、電子ジャーナルを語るにあたって、手紙が主たる学術コミュニケーションだった 16 世紀から語られたことだ。その展開に、学術出版史に電子ジャーナルの歴史を位置づけようとされた強烈な意志を感じた。

続いて深田氏は自らの体験をもとに、時代区分を示された。

学術図書を発行するオーソドックスな学術出版社は、1970 年を境目に主たるメディアを図書から雑誌に移行する。1980 年代になるとデータベースの時代を迎え、1995 年から電子ジャーナルの時代、2006 年からは電子ブックの時代が始まる、と。

学術情報基盤の研究と言えば倉田敬子氏の『学術情報流通とオープンアクセス』（勁草書房、2007 年）が図書館業界ではよく知られているが、メディア研究の世界では、箕輪成男氏の一連の著作や長谷川一氏の『出版と知のメディア論：エディターシップの歴史と再生』（みすず書房、2003 年）が知られ、学術コミュニティがどのように変容したかに焦点をあてている。今回のお話は、学術コミュニティの変容を考察する上で重要な証言であり、残念ながら一時間弱のお話では大変にもったいない気がした。

そして、これも意外だったのは、エルゼビア社が、最初は学術図書を主としたオーソドックスな学術出版社だったこと。海外市場へ展開（いわゆるグローバル化）を視野にいったときから、大きく変容し、私たちの知るエルゼビア社になったことだ。

では、何故、紙の歴史からだったのか？ やはり、電子リソースの理解には紙の歴史の理解が不可欠だからなのだ。電子リソースは、プリント版の雑誌や索引がベースになっている。最近、私は新人研修やリテラシー講習のときに、この部分を強調するようにしている。今、大切なのは「紙も電子も両方をつかいこなす」ことで、電子版がない部分は、プリント版の資料を利用しないといけないが、いったい、どの資料とどの資料を

接続すれば、情報が紙と電子の間を滑らかに移行していくか、統計資料などでは、この連結点を探すのが意外に難しい。

深田氏の話を知って、難しさがあっても、紙から電子の歴史を意識させなければ、連続的な資料提供できないことを実感した。

深田氏は今後の展開として、いくつかのアイデアを語られた。

「キーワード検索とは違うシステムの導入、利用者の検索意図を反映させた新しい検索方法の開発」「英語・日本語を意識しなくても検索し、読み、投稿できるプラットフォームの導入」などである。特に後者は、グローバル化において英語による論文の作成が主流となり、日本の研究者が苦戦している現況の打開という思いを込めたアイデアだけに、非常に感銘を受けた。

質疑応答で、深田氏は、「歴史は戻せない」という言葉を発せられた。

この言葉からは、いろいろな意味を感じとれる。

かつての古き良き学術コミュニティへは帰りたくても帰れないという意味。学術出版の編集や出版コミュニティは、新旧の技術が渦巻いて混沌としているが、船出してしまった以上、進むしかない決意。もう新しいステージに入っているという認識。新たな歴史を作ってほしいという叱咤激励。

短い言葉であったが、重みを伴って、耳の奥に届いてきた。

(終わり)

なかむら たけし(大阪市立大学学術情報総合センター)

小特集:大図研京都ワンディセミナー

「電子ジャーナルはこれからどこへ向かうのか？」

～深田氏・林氏による学術情報動向に関する講演会～」参加報告

学術情報流通の未来について考える一日

塩野 真弓

7月18日(土)、大学コンソーシアム京都にて行われた大図研京都ワンディセミナー「電子ジャーナルはこれからどこへ向かうのか? ～深田氏・林氏による学術情報動向に関する講演会～」に参加させていただきました。講師はケンブリッジ大学出版局(元エルゼビア・ジャパン社長、元シュプリンガー・ジャパン社長等)の深田良治氏と、文部科学省 科学技術・学術政策研究所 科学技術動向研究センター長補佐(元日本化学会学術情報部課長、SPARC Japan 運営委員)の林和弘氏のお二人でした。関西でお二人のお話をきける機会はめったにないということで、当日は広い会場が満員になっていました。

このセミナーについて、別途詳細な資料を作成されるときいておりますので、ここでは特に印象に残ったことのみを述べさせていただきます。

深田氏の講義では電子ジャーナルを中心とした学術情報の流通について草創期からこれからの展望までについてうかがうことができました。草創期からみると現在の電子ジャーナルの発達には隔世の感がありますが、現在が完成形というわけではなく、例えば将来は翻訳機能の進化によって英語や日本語を意識しなくても検索・読解・投稿ができるようなプラットフォームができるのではないかというお話がありました。STM 分野では

英語での発表がスタンダードになっている一方、英語以外の言葉で思考しなければ生み出せない研究があり、そういうものを大切にしていく必要があるということです。これまでの技術の進歩を考えれば、十分実現可能な未来のように思われます。余談になりますが、講義で出てきた「SD-21」という言葉を帰宅してからウェブで検索すると、昔の大学図書館のニュース（トライアルのお知らせなど）や契約問題を扱った記事などがたくさんヒットし、歴史が感じられて大変興味深かったです。

林氏の講義では、現在がまさに学術情報流通の変革期であるということを実感しました。図書館員の場合、研究成果がオープンになることにネガティブなイメージを持つ人はあまりいません。ですが、「オープンサイエンス」のステークホルダーは多種多様であり、例えば知財分野など、研究成果のオープン化について大変慎重な態度をとる人々もいるということを知る事ができました。また、論文だけでなくデータも含めたオープン化が進む中で、今後はデータの引用度を可視化することも可能になるというお話が印象的でした。論文の総数や被引用数のみから見ると、日本の研究力は低下しているように思われています。しかし、今後データの引用度も評価軸に加われば、日本の研究力がより高く評価される可能性があるということです。さらに、研究データの作成に関わったいわゆる研究者という身分でない人（技術職員など）への評価も可能になるということです。こうしたことはこれまで考えたこともなかったので大変新鮮に感じました。

普段の業務では、電子ジャーナルというどうしても価格の上昇やそれに伴う契約の見直しといったことにばかり関心が行きがちです。もちろんそれはとても重要なことなのですが、同時にもっと広い視点から学術情報流通の未来について考えなければならぬと感じた一日でした。オープン化の流れの中で私たちがどのような役割を果たせるのか、まだ明確なイメージを持っていませんし、正直何もできないまま取り残されるのでは？という不安も感じています。ですが、林氏のお言葉を借りると「どんな分野でも10,000 時間もやればプロになれる」、「あきらめたら、そこで終わり」ということで、覚悟を持ってがむしゃらにやってみれば（？）道が開けるのかもしれませんが。パネルディスカッションでは、終わった後で哲学書を紐解きたくなるような、本質的で深い議論がかわされていました。企画・運営をされた大図研委員の皆様、貴重な機会を誠にありがとうございました。

しおの まゆみ（京都大学附属図書館）

小特集:大図研京都ワンディセミナー**「学びの空間「キャンパス全体がラーニング・プレイス (Commons) 」の実践」参加報告****ラーニング・プレイスと「ありえないはありえない」の射程****齊藤 涼**

私は立命館大学の学部4回生の齊藤涼と申します。現役の学生として、「学びの空間「キャンパス全体がラーニング・プレイス(Commons)」の実践」に参加させていただいた感想を述べます。このセミナーでは、最初にOIC(大阪いばらきキャンパス) 教学課のコモンズ担当をされている河合孝一郎さんによるご講演が行われ、その次にキャンパスの見学、そして最後に講演と見学をふまえたディスカッションが行われました。

最初に行われたご講演で最も印象的だったのが、キャンパス全体をアクティブな学びの場とすべく奔走されている河合さんの「ありえないはありえない」という考え方でした。この考え方は、少し前まではありえなかった図書館での活発なディスカッションが、ラーニング・コモンズという形で、多くの大学図書館で整備され始めている現状に鑑みたものです。「今ありえないと考えているものでも、未来ではきっと当たり前になっている。」という信念をもって、新たな学びの場を整備されていく河合さんのお話は刺激的で、大学図書館をはじめとした学びの場の進化はまだまだ続いていくのだと感ずることができました。

次に行われたキャンパス見学では、学生の学びを促す工夫が多く見られました。中でもPS-Loungeという空間は、職員と学生が協同でデザインしたもので、極力学生のニーズを反映しようとしたというご説明がありました。もともと立命館大学では、学生によるラウンジの活用が活発です。私が在籍している衣笠キャンパスでもラウンジの活用は活発で、授業におけるグループ発表の打ち合わせやサークルのミーティングなど利用目的はさまざまです。このように普段から活用されているラウンジを、学生からの要望を採り入れてさらに発展させたのがPS-Loungeでした。このラウンジでは、従来から設置されていたグループ用のデスクはもちろん、各人が本を持ち寄ってストックしておける本棚が設置されていることが印象的でした。自分の活動にまつわるものを持ち込むことによって、その空間に愛着が生まれるだけでなく、周りの人々の興味を惹きつけ、ともに何かを生み出す可能性がこのラウンジにはあると感じました。また、このような空間を学生の意見を採り入れながら設置したことで、学びの空間を大学側から一方的に用意するのではなく、学びの主体である学生に新たな意識を生じさせることができるのではないかと感じました。

キャンパスの見学が終わった後は当日の内容すべてをふまえたディスカッションが行われました。ここでは、学生に主体的な学びを促す工夫などについての質問などが出ていました。その回答としては、図書館やラウンジなどで学生が勉強している姿を、別の学生が見ることで感化され、主体的な学びへとつながっていくというものでした。しかし、私はこの回答に少し疑問を覚えました。確かに、見る・見られることで周囲を意識し、学びへのモチベーションを高めることは意義のあることだと思います。しかし、見る・見られる関係の間で行われるコミュニケーションは深いものとは言えません。現在のラーニング・コモンズでは授業で与えられた課題のために、授業で組まれたグループが各々独立して活動していることが多いように思えます。利用者と利用者が出会い、ともに何かを生み出していくラーニング・コモンズでは、授業によって規定されたグループの垣根を越えたコミュニケーションが行われるべきだと私は考えます。

このような、より深化したコミュニケーションを行うことによって、授業の枠にとらわれない本当の意味での主体的な学びを実践することができるのではないかと私は考えます。もちろんその場には他のグループと隔絶して、見る・見られるコミュニケーションにとどまるグループが存在することも必要だと思います。重要なのは、利用者が望むコミュニケーションの深度に合わせて、ラーニング・コモンズの使い方を選択できることだと私は考えます。そのためには、望んでいるコミュニケーションの深度に合わせたグループの棲み分けや、コミュニケーションを求める利用者同士を仲介するチューターの存在が必要だと私は考えます。

ただ、このようなことを実現するためには多くの工夫や高い技術が必要で、セミナー当日も「実現は難しい」という意見が返されました。確かに、前例もノウハウもない現状ではグループの垣根を越えたコミュニケーションは難しいと感じます。しかし、ご講演で河合さんがおっしゃった「ありえないはありえない」という言葉は、このことにもあてはまると考えられます。不勉強な学生である私では上記のような愚案しか思いつきませんが、現場でご活躍されている司書の皆さまであれば、より深度の深いコミュニケーションのあり方、それによってもたらされる主体的な学びについて多くのお知恵があると思います。そのお知恵を組み合わせ、「難しい」で議論を終えるのではなく、「ありえないはありえない」の射程をさらに拡大させ、ラーニング・プレイスの更なる進化がなされることを私は望みます。

さいとう すずみ(立命館大学 文学部 4 回生)

小特集:大図研京都ワンディセミナー

「学びの空間『キャンパス全体がラーニング・プレイス (Commons) 』の実践」参加報告

進化し多様化するキャンパス

加川 みどり

「学びの空間『キャンパス全体が ラーニング・プレイス (Commons) 』の実践」と題された大図研京都支部のワンディセミナーは 8 月 1 日という夏真っ盛りの日程で、なおかつ太陽のキラキラと照りつけるなか開催された。

今回のセミナーは 2015 年 4 月に開校した立命館大学大阪いばらきキャンパス（以下「OIC」と省略）の設計・運用まで携わっている河合 孝一郎氏のお話とキャンパス・コモンズの見学会という内容であった。詳細は他の方がわかりやすく報告文を書いてくださるだろうと想像し、私は自分の言葉で思うところを記録したい。

最寄駅は JR 茨木駅、大阪モノレール「宇野辺駅」阪急「南茨木駅」と 3 つの交通機関が利用できる好立地。しかも OIC ができて更に便利になったとのこと。地域住民にも歓迎されていることであろう。

「キャンパス・コモンズ」、「キャンパス全体、さらにキャンパスを取り巻く地区全体がラーニング・プレイス (Commons)」というコンセプトで、キャンパスを囲む塀が存在しない。キャンパス内にイベントホールや商工会議所等市民が利用できる設備があり、様々な世代の人々が集い、市民の憩いの場所となっている。市民や地域と連携することにより、さらに学びの可能性が広がる。また、このような学び方が生かせる学科を配置している。

街の中に大学の建物が存在しているというのは、ヨーロッパや関東の中心部では当た

り前の風景であるが、OICでは大学施設内の廊下にあたるコンコースと呼ばれるエリアにもベビーカーを押した親子連れの姿があるということに少なからず驚いた。

造り方として、図書館ラーニング・コモンズで得られたノウハウが発展して継承されており、設備や備品についても固定化されていない。昔の日本の「お茶の間」がリビングルームやベッドルーム、ダイニングルームとして利用されていたように、利用者自身が使い方を決め、その要望に対応できるような空間に仕上げられている。「ピアボックス」と呼ばれる黒板にも椅子にもテーブルにもなり得る「箱」が随所に用意されていて、利用者は各自工夫して使用されていることも興味深かった。

従来の「図書館ラーニング・コモンズ」とは図書館という「静」の空間に、ある程度の「ノイズ」発生も前提とした多様な利用方法が可能な「動」の空間を提供することが大きな目的であると私は考えている。OICのようなキャンパス全体がコモンズという状態でなくても、ここ数年キャンパスのいたるところに「ラーニング・コモンズ」的な空間が作られている。図書館の中における「コモンズ」の形も変わってくるのは当然であろう。OICの図書館の中には「ラーニング・コモンズ」は必要ないという意見もあったということであるが、図書館の中に図書館の資料を利用する方々のための「動」の空間の提供は、ある程度は必要ではないかと個人的には思う。

OIC全体の雰囲気としては、オープンして間もないということもあってか、少々荒削りにも感じた。8月のキラキラと輝く太陽を遮ってくれる樹木が生長する頃には、ソフト的にもハード的にもさらに成熟していることだろう。数年後再度訪れてみたい施設である。

思い起こすと、同じく京都支部のワンディセミナーとして2012年12月に開催された、立命館大学の衣笠キャンパス図書館の「ぴあら」の見学会が、「ラーニング・コモンズ」という考え方について改めて認識し、コンセプトやアイデアを職場に持ち帰り検討するきっかけとなった。その後、様々な機関の方々に助言や施設の見学に便宜を図っていただき、おかげさまで本学でも2014年11月に小さいながらも「ラーニング・コモンズ」に相当する設備、「てらす」をオープンすることができた。

一息つく間もなく、立命館大学様は「キャンパス・コモンズ」という考え方でのキャンパスをオープンされた。昨今の大学が置かれている状況を考えると、常に新しいことを取り入れ、進化・発展し続けないと未来はない。考え方もプロジェクトそのものも壮大である。ここまで大きなプロジェクトとなると本学のような小さな機関にとっては夢物語。溜息をつきながら眺めるしかないのか・・・と後ろ向きの考えばかりが頭の中を支配する。

否！その土地でないと味わえないグルメや雑貨の情報を求める消費者のために書店の情報誌やインターネットには様々な情報が溢れかえっているではないか。おしゃれなブティックや隠れ家的なビストロ、予約を取るのが難しいペンション等を求める人々がいるように、高等教育サービスにも、誰もまだ気がついていない可能性があるのではないか。多様化の時代ゆえ、他とはちょっと違うスパイスで味付けし、差別化された教育や環境の提供もありではないか・・・。これからも大規模機関は大きなプロジェクトを展開していくことと思う。そのたびに溜息をつくだけではなく、小さなヒント、工夫やアイデアを見つけて盗むために、これからも積極的に見学会や勉強会に参加したい。

かがわ みどり(神戸松蔭女子学院大学)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。2014年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部（kyoto@daitoken.com）まで。